国家構想の展開と木戸孝允

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2013-05-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 落合, 弘樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/14343

国家構想の展開と木戸孝允

Development and Takayoshi Kido of a national design

落合　弘樹

OCHIAI Hiroki

この研究の目的は、大久保利通、西郷隆盛とならんで「維新三傑」に位置づけられ、明治維新の最大の功労者と評される木戸孝允（桂小五郎）の、近代国家形成に果たした役割を再評価しようとするものである。大久保や西郷、さらに木戸と同じ長州藩出身で思想的指導者である吉田松陰や、長州諸隊を率い倒幕に奔走した高杉晋作、明治国家をリードした伊藤博文、山県有朋に比べると、木戸孝允の位置づけは必ずしも明確ではない。また、彼を直接の素材とする研究も、大正期における妻木忠太『松菊木戸公伝』のほか、大江志乃夫『木戸孝允』（中公新書）、松尾正人『木戸孝允』（吉川弘文館）による伝記的研究が存在するが、前者は幕末、後者は王政復古以後に重点が置かれている。

本研究は、木戸が幕末の文久期に奉勅攘夷へと藩是を導き、大久保・西郷との角逐のなかで西南戦争中に病死するまで、国家構想のプランナーとして果たしてきた役割を追究することに力点を置いているが、重点課題を以下のように設定している。

①、薩長同盟成立前後における木戸の長州藩内におけるリーダーシップ確立と倒幕後の将来構想。

②、雄藩の割拠から郡県化による統一権力の構築という国家構想が形成された背景と、廃藩置県後の国家像の展望。

③、岩倉遣外使節団の副使として欧米を実見した木戸が、近代国家の政治システムである立憲制を日本の将来構想に必須な要素と認識していく過程。さらに、彼の文明観や宗教観に与えた影響。青木周蔵、品川弥二郎、桂太郎らドイツコネクションとの関係。

④、いわゆる「大久保政権」する批判的立場の実相と、華士族制度確立の構想。

2006年度の調査は、まず基本情報として文献収集による先行研究の再検討を行った。田中彰、青山忠正らによる幕末長州藩研究のほか、史料批判の密度が急速に増している近年の幕末史研究全体に視野を据えることを心がけた。

次に、基本史料である日本史籍協会叢書『木戸孝允日記』、同『木戸孝允文書』を精読し、木戸の時々における状況判断や思考の把握に努めた。また、刊行が開始された『木戸孝允関係文書』に収録されている、青木周蔵、伊藤博文、井上馨、岩倉具視の木戸宛書翰と、彼らへの木戸の発翰を照合することにより、従来の研究では把握できなかった木戸の考え方を浮き彫りにさせる作業をすすめている。このほか、『高杉晋作史料』や『大久保利通文書』、『岩倉具視関係文書』、『伊藤博文関係文書』を通じ、木戸の周辺にいた人物が、彼をどのように評価していたのかという点についても検証を進めている。

非活字化史料については、国立国会図書館憲政資料室に所蔵されている三条実美関係文書、井上馨関係文書、品川弥二郎関係文書、青木周蔵関係文書、桂太郎関係文書などから関連する史料を抽出したが、初年度は上記の基本史料分析を優先したので、検討は次年度の課題となった。

旅費を使用しての現地調査は、山口県山口市および萩市を中心に進めた。山口市では、山口県文書館所蔵毛利文庫の調査を行い、『木戸孝允文書』に未収録の意見書や報告書をチェックするとともに、「桂小五郎京師変動ノ際動静」、「京都江戸諸国事情報知録」といった風聞探索書を通じ、幕末期における木戸の動向の把握に努めた。次年度においても同館の調査を継続し、毛利文庫にくわえ、吉富簡一関係文書、周布家文書など諸家文書の解析を通じて、木戸と接触のあった人物の動向を検索するつもりである。また、萩市においては萩博物館所蔵の高杉晋作資料の閲覧、さらに木戸の生家など関連史跡の見学を行った。

本研究による成果は、『ミネルヴァ評伝選　木戸孝允』執筆に活用していく予定である。